板書例

2 第四段

下人の変化

本文	背景
太刀を押さえ冷然	老婆を威圧しながらも、冷静・冷酷な心で対応
大きなにきびを気にして	老婆の話に共感するのではなく、違う視点（悪の実践）へ向かうきっかけ

変化

転換点①

しかし

下人にある勇気の喚起

	門の下	２つの勇気
前の状況（前の勇気）	門の下で飢え死にか盗人かで迷う	老婆を捕えた勇気 あらゆる悪への反感 悪を憎む心
ある（新）勇気の発生	Ⓐ門の下で下人に欠けていた勇気	Ⓑ老婆を捕えた勇気（正義感）とは 反対
結局	盗人を積極的に肯定する 勇気	正義感 ＝ 勇気

転換点②

きっとそうか

嘲るような声で念を押した

問 ⇦ どうしてか？

	下人の内情
嘲るような声（皮肉）	老婆の悪の論理の実践を下人が老婆に対して行った場合、その本人が最初の被害者となる皮肉から
念を押した（確認）	悪の論理は生きるために許されることの再確認 同時 老婆自身がその被害者となることへの同意

では

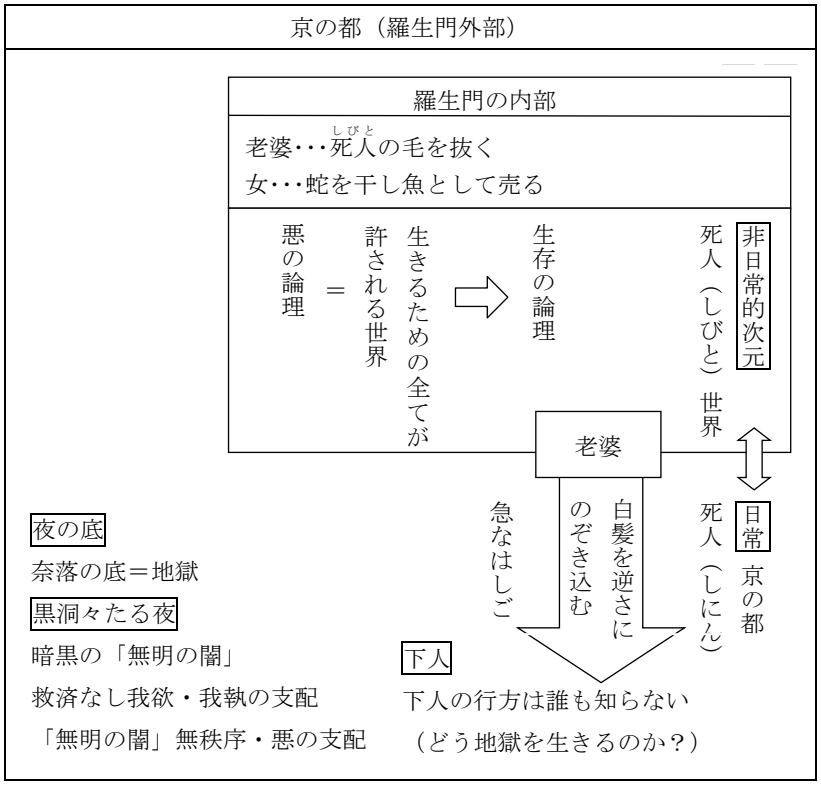
転換点③

不意に右手をにきびから離して↓初めて利き手が解放

問 ⇦ にきびの象徴とは？【悪の実践の起点】

象徴	
①	悪の実践を束縛している正義感という障害（への象徴）
②	若さ・サンチマンタリスム・ストレスなどの心理的性癖（という象徴）

最後図でまとめると


京の都（羅生門外部）
羅生門の内部
老婆･･･死人（しびと）の毛を抜く
女･･･蛇を干し魚として売る
非日常的次元
死人（しびと）世界
生存の論理
生きるための全てが許される世界
＝
悪の論理
老婆
日常
死人（しにん）
京の都
白髪を逆さにのぞき込む
急なはしご
下人
下人の行方は誰も知らない
（どう地獄を生きるのか？）
夜の底
奈落の底＝地獄
黒洞々たる夜
暗黒の「無明の闇」
救済なし我欲・我執の支配
「無明の闇」無秩序・悪の支配